

巻頭言

「暴力からの人間存在の回復」研究会 ワークショップ「実存思想の展開可能性」

人文科学研究所政策重点研究プロジェクト「間文化現象学と人間存在の回復」内の「暴力からの人間存在の回復」研究会では、2017年10月13日（金）14時より、立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館第3会議室において「実存思想の展開可能性」と題するワークショップを開催した。このワークショップのコーディネートは同プロジェクトの研究分担者である横田祐美子氏（立命館大学大学院文学研究科博士後期課程四回生）が行ない、企画立案、提題者の選出、依頼など、開催に向けての実務を行った。

コーディネーターの横田氏による、このワークショップの趣旨文の一部を以下に引用する。

「本ワークショップはいわゆる「実存主義」の流れに与しない現代の思想家たちを取り上げ、サルトルやハイデガーなどからの影響関係も考慮しつつ、新しい実存思想について考察することを開催趣旨としております。ハイデガー批判から生命全体を含んだ独自の有機的実存思想を練り上げるヨナス、実存主義批判をくりかえし実存主義の言説が「実存」そのものを棄損していると考えるバタイユ、実存主義の影響を受けていない世代のマラブーの特異な実存解釈を介して検討されるナンシーなどをとおして、今後の実存思想の展開可能性について考えていきます。」

このような趣旨のもと、発表者として戸谷洋志氏（大阪大学大学院 医の倫理と公共政策学教室特任研究員）、伊藤潤一郎氏（早稲田大学文学研究科表象・メディア論コース博士後期課程）、そして横田祐美子氏の三名による

発表が行われた。ここに掲載された論文は当日発表された内容をもとにしたものである。

戸谷洋志氏の論文「生命の、あるいは子どもの実存 ― ハンス・ヨナス（1903-1993）の倫理思想における実存主義の影響について」は、世代間倫理の提唱者として知られるハンス・ヨナスの思想を彼の師であったハイデガーへの批判とその克服の試みとしてとらえ、とりわけ「生命」概念と「子どもへの責任」を鍵として、ハイデガーの実存思想に対するヨナスの独自性を強調するものである。ヨナス自身が「実存主義」と自らを位置づけるかどうかについては明確にできないとしても、責任倫理として世界的な影響力を持ったヨナスの思想が実存主義の系譜に生まれながら、その克服の試みの上で、実存主義以外の面で問題を展開した独自性が強調された。

伊藤潤一郎氏の論文「存在論的差異の実在としての実存 ― マラブーのナンシー論から存在論的共同体論へ」では、ジャン＝リュック・ナンシー（1940-）を論じるカトリヌ・マラブー（1959-）の議論を検討しながら、ナンシーの共同体論と対比し、実存という観点からナンシーの存在論の輪郭を描くことが試みられる。マラブーはハイデガーの「存在論的差異」に対して、サルトル、レヴィナス、そしてナンシーがその差異の「物質性」を問題にしていることを指摘しながら、ナンシーの実存概念が存在の運動によって絶えざる変化のうちにあることを示そうとする。伊藤氏はその解釈を踏まえながら、さらにナンシーの実存概念をカントやハイデガーと比較検討しながら、ナンシーの実存概念が単一性や同一性を超過するものであることを示し、そこからナンシーの共同体概念における特異性の位相をあぶりだす。「実存」概念はナンシーの存在論的展開の鍵概念であり、彼の晩年の思想展開を準備する語でもあったのである。

横田祐美子氏の論文「実存とその表現をめぐる問い ― ジョルジュ・バタイユにおける実存主義批判と生の言語について」では、ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）が実存主義運動に批判的であった点を踏まえながらも、彼に

として「＜実存＞をいかに語るべきか」という言語と表現の問題が存在したことを指摘し、実存主義者と見られることを嫌ったバタイユにおいて「実存」の表現という問題が切実な問いであったことが示される。横田氏は実存主義の思想史的系譜をたどったのち、バタイユが実存主義を「生と同次元のもの」と評価していたことを示す。他方で、バタイユはサルトルの実存主義に対して批判的であったが、それはサルトルが実存の表現における意味の構造を問題とすることがなかったのに対して、バタイユは実存が意味の論理構造においては語りえないものであると考えていたからである、と横田氏は指摘する。バタイユは実存主義者と呼ばれることを嫌ったが、実存を語るべき言語を「叫び」として、意味の構造に収まりきらない表現として、自らの思想の根本問題に置いていたのであれば、彼はやはり「実存」の思索者であったと言えるのである。

ワークショップ当日は以上のような内容の発表に対して、多くの質問が寄せられ、充実した議論が行われた。若手の研究者たちによって、古典的な哲学の問題と現代思想とのつながりが明らかにされる場を持てたことは、当研究会にとって大きな成果であった。コーディネーターの横田祐美子氏、発表者の戸谷洋志氏、伊藤潤一郎氏に御礼を申し上げたい。

「暴力からの人間存在の回復」研究会代表
加國 尚志（立命館大学文学部教授）

